

# 露木宏編著「日本装身具史」をめぐって②

## ジュエリー関連用語の概念、定義、変遷など



日本宝飾クラフト学院理事長・露木宏氏の編著書「日本装身具史—ジュエリーとアクセサリーの歩み」(美術出版社刊)をめぐる有朋ソサエティーでの講演のパート2(後編)を紹介する。質問者は「ジュエリー言語学」(柏書店松原刊)などの著書で知られる桃沢敏幸氏。いろいろな話が出たが、今回は用語にまつわる諸問題を取り上げた。

**文化とは？  
特にジュエリー文化とは？**

桃沢●本書中で、しばしば「文化」という言葉が出てきます。業界でもよく耳にしますが、いまひとつその概念が分かりません。露木さんのお考えになる「文化」、特に「ジュエリー文化」とは何ですか？

露木●確かに本書では「飾る文化」、「装身具文化」を始めとして、時代を表すのに「縄文文化」、「弥生文化」、古代中国のことと「唐の文化」など、いろいろな所で「文化」という言葉を使っています。年表も「装身具文化史年表」としました。「文化」はいろいろな意味に使われる言葉ですが、こうした使い方から

も分かるように本書ではある時代や社会が生み出した物心両面の成果として定義づけて用いました。すなわち精神的なものであれ物質的なものであれ、人が生み出したすべてのモノが「文化」なわけで、高級かどうかとか、優秀かどうかというようなレベルは問わないニュートラルな言葉です。文化人類学という学問の世界には、それぞれの人間集団は個別の文化を持っていて、その個別文化はそれぞれ独自の価値を持っているという「文化相対主義」という考え方があります。本書でもそういう立場に通じる「文化」という言葉の使い方をしました。こういう考え方方に立たないと装身具あるいはジュエリーの歴史などは書けないのでです。縄文時代の首飾りと現代のネックレスの優劣を競ったり、江戸時代の髪飾りと大正時代の

東髪用の髪飾りのどっちがレベルが高いかと比較してもほとんど意味がないと言ったらお分かりいただけるでしょうか。

一方、文化という言葉は、文化国家、文化産業、文化人などと言われるよう「知的な」とか「進んだ」、「高度な」など、何かと比較して高低、優劣を意味するのに用いられることもしばしばあります。日常的にはこちらの用いられる方のほうが多くて、古くは明治時代に言われた「文明開化」や「ハイカラ」などもこうした使い方でした。

さて、「ジュエリー文化」ですが、ジュエリー文化と言う場合の「文化」は、今、お話を文脈で言うと、後者の意味ですなわち、ジュエリー先進国である欧米と比較して高い低い、あるいは進んでいる遅れているというように使われ

ることがほとんどのようです。例えば世紀末に、「本誌Tokyo Jewelers No.16、17」の誌上で行われた「今世紀日本の宝飾界は独自のジュエリー文化を築き得たか?」という対談があるのですが、ここでは主にヨーロッパとの比較の中で、日本のジュエリー文化の優劣あるいは高低が論じられています。結論は、簡単に言ってしまえば20世紀の日本にジュエリー文化と言えるほどの文化は育っていない、ということです。この結論が妥当かどうかは別として、現代の日本のジュエリー文化を考える好テキストとなっています。まだ読んでいない方は一度熟読してみてください。日本の今のジュエリーの問題がいろいろ見えてくるはずです。



Tokyo Jewelers16号  
1999年4月30日発行



Tokyo Jewelers17号  
1999年7月30日発行

## 「ジュエリー」ではなく、なぜ「装身具」としたか

桃沢●書名、また本文の中で「ジュエリー」と言わず、「装身具」に統一されたのは、なぜですか。

露木●本のタイトルにジュエリーを持ってきて「日本ジュエリー史」とするか、それとも「日本装身具史」にするかは最後まで悩みました。

出版社の営業サイドからも「ジュエリー」の方が今日風で、その方が売れるかもしれないのではないかという意見が出ていました。

しかし、最終的には「日本装身具史」とさせていただき、サブタイトルとして「ジュエリーとアクセサリーの歩み」と付けました。

「装身具」をタイトルに用いたのは、いくつかの理由があります。

一番の理由は「ジュエリー」という用語の意味するところが曖昧で、まだ意味の統一がなされていないということです。

例えば業界団体の(社)日本ジュエリー協会では、「ジュエリー=貴金属・宝石を用いて作った宝飾品」と定義し、素材を貴金属と宝石に限定しています(日本ジュエリー協会刊、「ジュエリー用語事典」など)。

ところがジュエリーデザイナーの団体である(社)日本ジュエリーデザイナー協会では素材に制限を設げず「ジュエリー=装身具」として定義づけ、造形表現の一つのジャンルとしてジュエリーを位置づけています(日本ジュエリーデザイナー協会刊、「JJDA2007」など)。

かたや宝石・貴金属重視、かたや宝石・貴金属を使わなくともジュエリーであるという立場です。このように、同じく「ジュエリー」と言ってもその意味する内容は大幅に違います。

そこで最終的には、まだ意味の確定

しない「ジュエリー」ではなく、明治時代から用いられている宝石・貴金属製品も、それ以外の素材の製品も含む、広い概念の「装身具」という用語を書名に用いました。

「装身具」にこだわったもう一つの理由は、「ジュエリー」にすると、アイテムとしてはネックレス、ブレスレット、イヤリングなどの西洋装身具が中心となってしまいます。そうすると日本の中世・近世の代表的装身具である腰の飾りや髪の飾りが見えにくくなってしまうんです。

近代の日本の装身具や現代の装身具を語る時にはまだしも、古代・中世までキチンと語ろうとする時には「ジュエリー」というくりですと、いろいろ不都合が起きます。

今回の本は近代や現代も視野に入っていますが、中世・近世にも多くのページを割いています。この時代を適切に語るためにも「ジュエリー」よりは装身具の方が語りやすいということで「装身具」のタイトルを採用し、本文中でもこの用語を多く用いましたということです。

「装身具」という用語は、ちょっと硬い言葉ですが由緒ある言葉で、日本では明治時代から用いられています。宝石や貴金属で作られた装身具(宝飾品=ジュエリー)は勿論のこと、それ以外の様々な素材で作ったもの(アクセサリー)も含む言葉で、日本の身を飾る文化の歴史をトータルに扱ったこの本にはふさわしい言葉だと思っています。

ジュエリーやアクセサリーは外的に身を飾るためのモノではありません。精神的要素を多分に含んだモノで「心を装うモノ」であるという側面は無視できません。

そういう意味では「装身具=装心具」とも言えるわけで、「心を装う」ことを連想させる「そうしんぐ」という語感を私個人としては大変気に入っています。

## ジュエリーの定義

桃沢●とすると、露木さんの考えるジュエリーの定義は何でしょう？

露木●ジュエリーとは？と問われれば、私は「主に宝石・貴金属を用いて作られた装身具」と定義したいと思います。

「主に」と但し書きを付けたのは、宝石・貴金属以外でもその時代、時代によって貴重な素材はあるわけで、それらによって作られた装身具もジュエリーと認めてよいと思うからです。

宝石に準ずるものとしては、異論もあるでしょうが、合成石があります。合成石であろうと、美しければ宝石に準ずるものと考えています（反対に、天然石であっても美しくなければ宝石扱いしない）。

貴金属に準ずるものには赤銅や四分一など金や銀を含む日本の伝統的合金があります。歴史的に見てもこれらは宝石・貴金属に類するものであり、これらの素材で作った装身具はジュエリーと言ってよいと考えています。

同様に、シルバーで作ったものはシルバーアクセサリーと言われる場合とシルバージュエリーと言われる場合がありますが、シルバーは伝統的に貴金属の一種とされていますのでジュエリーと言って問題ないと思います。

それにしても、先程紹介したように、日本の代表的ジュエリー団体である日本ジュエリー協会と日本ジュウリーデザイナー協会のジュエリーの定義の違いには驚きです。

ジュエリーの素材を宝石・貴金属類に限定するのか、それ以外のどんなものでもいいのかは、ジュエリーの本質に関わる大問題なはずです。両団体で「ジュエリー用語検討委員会」的なものを作って、一度じっくり議論していただきたいものです。

## ジュエリーの範囲 —— どこまでがジュエリーか

桃沢●身に付けるものだけでなく、周囲に置き、その人の気分を浮き立たせ、周囲の雰囲気をよくする物、すなわち装飾を兼ねたステーショナリー（机上用品）やガジェット（小物）も、ジュエリーと言ってよいとの意見がありますが、露木さんのお考えはどうでしょう？

露木●私もそうした意見を聞くことがあります。

甲府などでは水晶やメノウで置物などをを作る研磨業者がいます。また、伝統的には、べっ甲やサンゴの工芸品もありますので、これらをジュエリーとするかどうかは、特にそのことを仕事をする業者にとっては大事な問題だと思います。

宝石素材で作った物だからジュエリーと呼びたいという気持ちは分かります。

しかし、どうなんでしょう。貴金属、例えば金で作った置物はジュエリーでしょうか。金の置物、または金の工芸品と呼んだ方がピンとくると思うんです。

それと同じで、宝石素材を使った物でも、身に付けるもの以外はジュエリーと言い難いと思います。

直接的に身に付けないまでも、携帯する物までがジュエリーと呼べる領域の限界点でしょう。

『日本装身具史』でも正倉院の玉帶（ぎょくたい）や玉佩（ぎょくはい）などの腰の飾りは装身具としましたが、べっ甲やコハクで作った物であっても身に付ける物でないものは「宝飾工芸品」として、装身具とは区別して書きました。

## 「ダイヤモンド」か「ダイアモンド」か

桃沢●本書192ページの「資料・日本装身具文化史年表」に、1923年（大正12）岩田哲三郎「ダイヤモンド」刊、とあります。

この書名は正しくは「ダイアモンド」です。それはともかく、現在日本の業界は「ダイヤモンド」と「ダイアモンド」が混在していますが、どちらが正しいか、あるいは適切か教えてください？ちなみにこの本では「ダイヤモンド」を使っていますね。

露木●校正ミスのご指摘ありがとうございます。次回刷る時に訂正させていただきます。

外語のカナ表記については、何年か前に日本ジュウリーデザイナー協会で、ジュエリーについて、「ジュウリー」か「ジュエリー」かという議論がありました。結局、協会名としては「ジュウリー」を残し、作品を指す場合や展覧会などの場合は一般性のある「ジュエリー」でいこうということになりました。

「Diamond」の和名、すなわちカナ表記を「ダイアモンド」にするか、それとも「ダイヤモンド」にするかというのもこれと同じ種類の問題だと思います。

基本的には英語発音にどちらが近いかという問題だと思いますが、ジュエリーの場合などは、アメリカ英語（Jewelry）では「ジュエリー」でいいが、イギリス英語（Jewellery）だと「ジュウリー」に聞こえるというような意見もあり、なかなかやっかいです。

「ダイヤモンド」か「ダイアモンド」についてですが、ここにいらっしゃる桃沢さんは、「ジュエリー言語学」（柏書店松原刊）の中で「常識的には「a」は「ア」がよさそうに見えるが、「ia」と二重母音になると「ア」音が前にくる「イ」に引きずられて「ヤ」と発音しても不思議はない。」と専門的な視点から書いておら

れます。私は別の角度からこの表記についてどんな変遷があるのか、手元にある単行本(小冊子を含む)で少し調べてみました(資料1)。

これを見ますと大正期に出た3冊のうち2冊が「ダイヤモンド」で、1冊が「ダイヤモンド」です。戦後は1970年までの本はほぼ「ダイヤモンド」です。1971年から76年位までには「ダイヤモンド」の表記が復活します。その後は現在に至るまで「ヤ」を用いる場合が圧倒的に多いわけです。

#### (資料1)

「ダイヤモンド」か「ダイアモンド」か  
(戦前および昭和50年前後までの図書名より)

○1912年(大正1)、尚美堂刊(小冊子)  
『ダイヤモンド』

○1921年(大正10)、久米 武夫、大倉書店刊  
『ダイヤモンドと真珠』

○1923年(大正12)、岩田 哲三郎、山崎商店出版部刊  
『ダイヤモンド』

○1962年(昭和37)、J・H・デュ・ブリシス、佐藤 元一訳、毎日新聞社刊  
『ダイヤモンドは危い』

○1964年(昭和39)、砂川 一郎、岩波書店刊(岩波新書)  
『ダイヤモンドの話』

○1967年(昭和42)、J・ディッキンソン、山室 ま  
あら詠、朝日新聞社刊  
『ダイヤモンドの本』

○1968年(昭和43)、機械経済新聞社刊  
『ダイヤモンド物語』

○1969年(昭和44)、砂川 一郎、丸善刊  
『ダイヤモンド——そのおいたちと性質』

○1970年(昭和45)、大津 円子、草土文化刊  
『ダイヤモンド物語』

○1970年(昭和45)、最上 公司、講談社刊  
『ダイヤモンド・コードを行く』

○1971年(昭和46)、近山 晶証・監修 全国宝石  
学協会刊  
『ダイヤモンドの専門用語とグレードの基準』

○1974年(昭和49)、乙竹 宏、同友館刊  
『真珠とダイヤモンド』

○1976年(昭和51)、同友館刊  
『ダイヤモンド・デザイン』  
(ダイヤモンド・インターナショナル賞作品集)

○1977年(昭和52)、松井 栄一、実業之日本社刊  
『供出ダイヤモンドの秘密』

※これ以降の刊行書はほとんどが「ダイヤモンド」と表記。

## 『金色夜叉』の中の「ダイアモンド」

露木●なぜ、このように表記に違いが出るのか分からないところが多いのですが、大正時代に「ア」が用いられたのは、「金色夜叉」影響が大きいのではと考えています。「金色夜叉」は尾崎紅葉が明治30年に読売新聞に連載した小説で、この中に寛一、お宮の仲を割くことになった300円(現在の価格だと300万円近い価格か?)のダイヤの指輪が登場します。

この小説では、ダイヤは江戸時代から用いられている「金剛石」と書かれていますが、「ダイヤモンド」とルビがふってありますので、当時はそのように呼ばれていたことが分かります。特にカルタ会の場面でのダイヤは有名で、ここでは「ダイヤモンド」が11回も連呼されます(資料2)。金色夜叉は尾崎紅葉の代表作であり、しかも明治期の小説では最も大衆に愛読された大ベストセラー小説です。その後、舞台でも何度も上演され、演歌としても唄われています。大正期の本では「ダイヤモンド」より「ダイアモンド」の本が多いのはこの金色夜叉に依る所が大きかったのではないでしょうか。

とは言っても、大正10年には宝石研究家の久米武夫が「ヤ」の表記を用いた『ダイヤモンドと真珠』を書いていますし、明治から昭和初期の広告や商品カタログでは「ダイヤモンド」と書いてあるものもたくさんあります。例えば、『ジュエリーの歩み100年』(美術出版社)の23ページ、31ページを見ていただけると分かりますが、明治期を代表する宝石・貴金属商は「ダイヤモンド」と「ヤ」を用いています。天賞堂や御木本真珠店のカタログなども「ダイヤモンド」です。このように、戦前までは「ア」と「ヤ」が両方用いられていました。「ア」と「ヤ」の併用時代と言っていいでしょう。

## 戦後、「ダイヤモンド」が一般化した理由

露木●ところが戦後は、しばらくの間「ヤ」一辺倒になり、1970年(昭和45年)頃まではほぼ全て「ダイヤモンド」です。

なぜこのように変化したのか。この点について、かつて、故近山晶氏は戦中・戦後の日本の特殊事情から説明しようとしました(「宝石の四季」104号、ジュエリージャーナル社)。

日本の軍部は石炭を重要な軍需物資として、大切な物という意味を込めて「黒ダイヤ」と呼んだ。また、戦時に半ば強制的に買い上げられたダイヤモンド(供出ダイヤ)は、戦後、大蔵省から放出される時「日銀ダイヤ」と呼ばれた。これらはいずれも大きな出来事であったので、その影響から「ダイヤ」あるいは「ダイヤモンド」という言い方が一般化したのではないかと推測します。

戦時に供出されたダイヤが戦後、日銀ダイヤとして売りに出されたのは1966年(昭和41年)です。しかし、資料で示してあるように昭和30年代後半から本のタイトルに「ダイヤモンド」が使われています。従って近山説はいまひとつ説得性に乏しいのですが、参考になります。私は戦時にダイヤモンドの買上げをした時の新聞記事に「ダイヤ献納へ続く陣列」(昭和19年8月16日、朝日新聞)と「ダイヤ」と表記してある点に注目したいと思います。すなわち、明治・大正時代には「ア」も「ヤ」も用いられたが、昭和10年代の終わりには、既に「ダイヤモンド」が一般化していたのではないか、その流れで戦後も「ダイヤモンド」と言われたのではないかと考えています。

ところが1971年(昭和46年)から突如、3冊の本が「ダイアモンド」になりますが、なぜ急に変わったのかその理由はよく分かりません。1971年の本『ダイアモンドの専門用語とグレードの基準』は鑑別機関の全国宝石学協会

## 金色夜叉の「ダイヤモンド」

明治31年刊、尾崎紅葉「金色夜叉」(春陽堂刊)復刻版より

(資料2)

恁して彼より此に傳へ、甲より乙に通じて、  
「金剛石！」  
「うむ、金剛石だ。」  
「金剛石？」  
「成程金剛石！」  
「まあ、金剛石よ。」  
「那が金剛石？」  
「まあ、まあ金剛石よ。」  
「見給へ、金剛石。」  
「可恐い光るのね、金剛石。」  
「三百圓の金剛石。」  
瞬く間に三十餘人は相呼び相應じて紳士の富を謳へり。

から出たものです。鑑別機関の多くは現在でも「ア」を採用する所が多いようですが、既に1970年代から「ア」を使っていることが本のタイトルからも分かります。ちなみに1974年刊の『真珠とダイヤモンド』も全国宝石学協会の機関紙に連載したものをまとめたものです。

現在は、鑑別機関を除けば、出版物をはじめ業界でも一般メディアでもほとんどが「ダイヤモンド」の表記を使っていると思います。「ダイヤモンド」と言っても「ダイアモンド」と言っても何を意味するか分かる訳ですから、どちらを使ってもいいと思うのですが、桃沢さんによると最近の若い人は「ア」を使うケースが増えているということです(『ジュエリー言語学』)。

桃沢●本書の中では、「ゆびわ」に「指輪」という漢字を当てています。これは今の業界では一般化した表記法です。しかし、かつては131ページVII-9の広告のように「指環」と書きました。漢字「輪」はハブとスパークのある自転車や車の「車輪(wheel)」のこと、一方「環」は「土星の～」「～になって踊る」の

ように「円の輪郭、中空の円形の玉(ring)」で、「指を通すワッカ」の意味では「指環」が正しいと思いますが…。

露木●桃沢さんの言う通りで、「ゆびわ」は「指環」と書いた方が正しいのだと思います。ですから「ゆびわ」を「指環」と書くのも、ひとつの見識だと思います。そこで思い出すのが奥村博です。この人は女性活動家の平塚らいでの共同生活者で、日本最初の創作指輪作家といわれる人です。指輪についての文章も数多く残したのですが、読んでみると、戦前・戦後を通じて指輪を「指環」と書いています。没後、昭和40年に刊行された遺稿集のタイトルも『わたくしの指環』(中央公論美術出版)となっています。このように「指環」にこだわった人もいました。なお、基本的には桃沢さんのおっしゃる通り「指環」のが正しいと思うのですが、なぜか明治時代から「指輪」と書くこともあったようで、三越呉服店の明治43年に出了広告や、同年の村松合資会社の広告などでは大きな字で「指輪」と書かれています。このへんのいきさつは、もう少し調べたいと思います。